



六百九十七字も書き、妹に出した手紙に、今書いたら何字書けるかわからないが、読み手がないなどと書いています。森永さんたちはいくらやってもすらすら書けないのに、私がそんなにさっさと書いたものですから、森永さんが「末恐るべし」といって非常に驚いていました。

京都大学で佐久間象山の記念講演会があつたときです。兄が新式速記を發明していたので京大から兄にその講演会の速記を頼んで来たのです。しかし兄は書けません。私が書けるようになっていたことをいつの間にか兄が知っていたとみえて私を連れて行くようにいうのです。それでいつしよに行つて書いたのです。後で新村 出先生（文学博士で兄の後援者）が本職の専門家より私の方がよく出来ていたといわれたということを知りました。

大学の専任速記者に安藤という人がいました。ある日兄を尋ねて来ました。兄は早速私を呼んで安藤さんの目の前で、国会の議事録を読んで私に書かせました。それを見て安藤さんはびっくりしたのです。兄が新しい中根式速記を創案しても兄自身は書けないし、人に教えても誰も書けないので、速記法そのものは立派でも書けないではないかといって兄を馬鹿にしていたのです。それを私が目の前で書いて見せたのでびっくりされ、自分の家に帰つてからも家族にこの話をされたとのことでした。

また兄が自分の友人に出した手紙の中に私が速記したの喜び、「天を仰いで快哉を叫んだ」といって